

(3)James Vane の死。

(4)Alan Campbell の死。

James Vane はシビルの弟であり、姉を死に追いやったドリアンを恨む人物であるが偶然の事故死を遂げる。Alan Campbell は化学者であり、ドリアン<sup>の</sup>強制的な依頼でバジルを消滅させた後、自殺を遂げる。生きていたとしても大勢に影響のない二人だが、消滅することによって、ドリアンはより安心して生きることができる。つまりドリアン<sup>の</sup>存在を否定するこの二人は「芸術の否定」の象徴であり、これを抹殺することによって芸術は存続し復活する。

(5)Dorian Gray の死。

ドリアンにとって自分の悪業を知る者は誰もいなくなった後、ただひとつ知るものはその肖像画だけである。変わり果てた肖像画を見るに耐えかねたドリアンは善にかえろうとするが、それは決して後悔や倫理的な理由からではない。肖像画を抹殺することで過去を抹殺し、ただ安楽に生きていこうとする芸術性<sup>の</sup>かけらもない理由からである。と同時に肖像画を美しく甦らせ、美を復活させるためでもあった。善へかえろうとするドリアンは、「偽善」の象徴である。悪に徹すればこそ美であったものに善という不純物を混ぜることによってドリアン<sup>の</sup>純粋性は失われ、作品の中における芸術性は失われる。この偽善、芸術の喪失を抹殺することによって、美を主体とした芸術が貫かれる。そしてまた皮肉にも美は肖像画に甦り永遠に残る。それはまた美の復活、芸術の復活を意味しているのだ。

これら5つの死を描くことで Wilde は美を主体とした芸術を貫いた。

〔Ⅲ〕頹廢の美学の意味するもの。

あくまでも美を主体とした芸術の追求であり、世紀末という時代の傾向である。Wilde は、19世紀末英国の、偽善が横行し、道徳というもので包まれて真実の見えなかった Victoria の社会において、以上の5つの死によって、本当は何が真実であるのかということ<sup>を</sup>逆説的に示した。これは芸術のための芸術を貫いた Wilde の、次世代への提唱でもあったのだ。

こうした意味でこの作品は、Wilde の美学を知る上で極めて重要であると同時に、まさに世紀末的な意義深い作品であると言えるであろう。

## 最後の歳月の意味

井村 君江

1897年5月18日、2年間の服役を終えた43才の Wilde は、Reading Gaol から Pentonville Prison に移され、翌19日に正式に入獄した同じ門より釈放される。出獄の日、London の保釈保証人 Stuart Headlam 宅で一休みの後、その日のうちに Newhaven から Turner と共にフランス Dieppe 行きの船に乗るが、Wilde はそのまま二度と故国イギリスに帰ることはなかった。1900年11月30日、セーヌ河に近い Hôtel d'Alsace の一室で息をひきとる迄、フランスとイタリアでの居の定まらぬ Sebastian Melmoth の3年は、「失意と苦惱と敗惨の日々」と烙印を押され、9月 Rouen での Douglas との再会は、「愛のよりを戻した」Wilde の性格の弱さを示すと批難されている。だが果してそう単純に解釈して済むものであろうか。そして作家 Wilde にとって出獄後の日々は、無くもがなの無意味な日々だったのであろうか。

出獄の日、乗船前に Wilde は Ross に、二つ折大判牢獄用紙80枚に書かれた Douglas 宛手紙を渡す。「過去の異常な行為に対して真の説明を与える唯一の記録」と説明されたこの手記は、更に「Bosie 父子の争いに利用され、失脚に至る経緯に関する〈恐ろしい本〉」であり、また失脚の原因であった愛する Douglas に対し、愛憎交錯した感情、非難と怨恨と思慕の入り混った思いを訴える *Epistola: in Carcere et Vinculis* でもあった。「表現のみが人生を認識し得るただ一つの道」と信ずる Wilde にとり、手紙の形で過去を表現することで心の区切りをつけ、再出発の turning point にしようとしたことは肯ける。5年後 *De Profundis* の題で削除版(1905)更に完本(1949,1962)が刊行されると、人生に於ける〈悲哀と謙譲を説く懺悔の書〉として作品に化す。

出獄後の Wilde は、「悲哀の教えてくれた新しい生活をし、悲哀を基調とした作品を試みる」新<sup>ワイルドの</sup>生を決意していた。「僕は再び創作出来るようになると思う」(Rothenstein 宛)、7時半起床、昼執筆、10時就寝の計画で未完の *A Florentine Tragedy* を書き上げる予定と Ross に書き、また聖書に基いた 'Pharos' や 'Ahab and Jezebel' の話の構想をたて、'Daphnis and Chloe' のオペラ歌詞依頼なども受けたがすべて結実を見ず、出獄後、約3年の間に書いた詩作品、評論、翻訳は次のものだけであった。

- *The Case of Warden Martin : Some Cruelties of Prison Life* (*Daily Chronicle* 紙 1897年5月28日)
- *The Ballad of Reading Gaol* (1897年6月1日執筆開始第1草稿完成7月20日, 10月14日脱稿, 98年2月13日出版)
- *Don't Read This : If You Want to be Happy Today* (*Daily Chronicle* 紙 1898年3月24日)
- *What Never Die, A Romance* (Barbey D'Aurevilly 著 Sebastian Melmoth 訳, Paris 1902年  
[*Mr. & Mrs. Davently* (Wilde の話を基に Frank Harris 作 1900年9月上演) ])

獄中の苦勞を通した体験が心を強く領していたことは、上記すべての主題を見ても肯けよう。若い頃 Barnard Shaw と共に社会主義者の集会で行った *The Soul of Man Under Socialism* の講演が、単なる机上からの理想論的社会改良論であったのに対し、*Daily Chronicle* 紙に掲載した二評論は実際の体験に基いたものであり、ここで初めて Wilde は社会改革論者としての資格が出来たようである。ちなみに1898年改正された英国監獄法は、Wilde の指摘を充分に取り入れたものであった。唯一の詩作品 *Reading Gaol* の Ballad も死刑囚 Thomas Wooldridge を歌っているが、獄中での体験そして実感が強く全詩に響いて、この詩をより深みのあるものにしていく。詩形 Ballad を選んだのも又、獄中で読んで親しんでいた Houseman の 'A Shropshire Lad' に依っている。

Ballad の第1稿が完成して40日後、Wilde はナボリの Hotel Royal で Douglas と再会する。出獄後25日目であった。2ヶ月の同棲生活の間に、この Ballad は完成を見ており、第5、6の2聯が加えられ、改訂もほどこされたが、Douglas の助言が強く働いていた。二人の関係に、単なる肉体的結びつきのみを見るのは、俗見ではあるまいか。Wilde は側に人が居るとき、創作の泉が溢れ出すタイプの人である。社交界で巧みに話しながら、物語を考える人である。Wilde は友人に、「Douglas が側に居ると詩が出来る、Douglas を愛しているのは詩人だから」と言っているが、Wilde にとって Douglas は、創作のエネル

ギーをかき立ててくれるいわば Muse であった。Ballad 執筆中の Wilde は、筆を先に進めるために Muse が必要だったのである。過去に於て *Woman of No Importance* 執筆中の時も、*The Ideal Husband* の時も共に構想を練り、二人の考えを作品に書き込んでいたのである。

Wilde の好む紫のクロスに金の十字架、その下に O. W. と頭文字の入った表紙の *What Never Die* は果して Wilde 訳か否か問題もあるが、この本の主題がダンディの徒 D'Aurevilly が「死せざるものは悲哀なり」と説くところに、イギリス社交界のダンディであり、獄中の体験を通し「悲哀」の尊さの考えに到った Wilde が、共感を覚えたであろうことは推察できる。唯美的服装の詩人、劇場の衆目を集めた劇作家、社交場のスマート・トーカー、こうした華やかな生活のみで Wilde が終ったなら、真の人生の意味に到り得なかったであろうし、軽佻浮薄の作家と烙印を押されただけで終ったであろう。出獄後1年の異郷で聞いた妻 Constance の死で家庭の絆は完全に絶たれ、経済上の理由から転々と居を代える生活は、精神に不安と焦燥を与え、病いを悪化させたであろう。だがこうした落ちぶれた Melmoth (the Wanderer) の姿の中に、出会った Ann Brémont 夫人は、「崇高なものさえ感じた」という。苦渋に満ちた晩年の日々は Wilde に人生の根を深淵に下させ、人間の真の姿を見せたのではあるまいか。「私は牢獄の中ではむしろ幸福でした。それは靈魂を発見したからです。かつて私が書いたものは靈魂なしで書いたものです。世の人はいつかは私が、靈魂の導きで書いたものを読むでしょう」と Wilde は言ったという。

*De Profundis* や *The Ballad of Reading Gaol* には、確かに靈魂からの声が聞える。しかし、この線上に作品を書き続けていくには、流浪の日々は余りに苛酷だった。だが、15年の過去の作品を、晩年の暗い日々を経験を通し、ある心の位相に到り得た作家として逡巡し通観するとき、華やかさの底に人生の真の意味を扱みとり得る目の光が、処々にあったことが感得できる。作品に表現されていないが、短い最後の歳月に、Wilde が厳しい人生の真の重さと意味とを体得し、流行作家時代には至っていなかった高い心の位相に達していたことを、淋しい流浪の姿にみるべきではなかろうか。ある意味でこれは「生活」が、「芸術」の徒に果した復讐であった。